

ヤア住民による参詣者の歓待

松波康男 まつなみ やすお / 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター特任研究員

アルファキー・アフマド・ウマルが没したのち、従者らが彼の墓廟を管理する過程で形成されたヤア村。現在の住民であるその子孫たちは、聖者廟参詣にヤアを訪れる人々を厚くもてなし、それを自分たちの使命と語る。ここではヤア住民による参詣者の歓待がどのようなものかを見ていこう。

ヤア村の成立

エチオピア、スーダン、南スーダンの3国の国境が接する地域一帯は深い森に覆われている。聖者アルファキー・アフマド・ウマルの墓廟は、この森を切り拓いてできたヤアと呼ばれる集落の中心に位置しており、現在はベニシャングル・グムズ州の西端に位置付けられる。

アルファキーは晩年の巡礼でメッカに到着した際に病床に伏した。彼は夢を見るなかで、ヤアと呼ばれる地に向かいそこで生涯を終えよという託宣を受けた。エチオピアに戻ったアルファキーは、従者らと共にヤアを目指し、現在のベニシャングル・グムズ州の一角に辿り着いた。その頃の同地は剥き出しの岩石と竹林の広がる未開拓地であった。アルファキーは周辺に暮らすマオ、コマ、ベルタといった民族集団と協力関係を築きながら、ともに村造りに取り組んだ。当時、この村造りに協力するために集まった人々は千人を超えたとされている。

従者らはアルファキーの住居を中心に各々の住居を築き、集落が形成された。

人々はモロコシ(タカキビ、コーリヤン)、トウモロコシ、ゴマなどを栽培し、牛や家禽を飼養する自給自足の生活を送った。このようにして集落が形成された際、住民はアルファキーを慕うムスリムである点、さらには同じ言語、慣習を共有するオロモであるという点で同質であるだけではなく、土地・家畜の所有においても平等であった。

アルファキーが息を引き取ったのは、ヤアに居を移したおよそ半年後の1953年のことであった。周囲の人々は悲しみに暮れつつも、アルファキーの生前の指示に従い、彼の住居の傍に墓廟を設置した。アルファキーを頼ってヤアを訪れる人の流れは彼の没後も止むことはなかった。

住民らは、聖者廟を組織的に管理し、一丸となって参詣者をもてなすためにモスク委員会を組織した。モスク委員会は、近隣にいくつもの製粉所を設置しそれを財源としつつ、集落内にも水力製粉設備やトラクターを導入するなど住民の農作業を支援しながら、宗教生活や組織的労働を規定し、宗教共同体としてのヤアの集落生活を軌道

に乗せた。

しかしながら、1974年に同国に樹立された軍部主導の社会主義政権(デルグ政権)は、ヤアの状況を一変させた。デルグ政権下で個人の土地・財産のみならず、ヤアの重要な経済基盤であった集落外の製粉所も接收された。また同時期、エチオピア・スーダン国境一帯では、エチオピア国軍及び両国の反政府勢力が戦闘を展開していた。これによりヤアはときに複数の軍勢から略奪を受けるなど、経済的・物理的打撃を被った。

デルグ政権が崩壊し、1991年にエチオピア人民革命民主戦線(EPRDF)が政権の座に就くと、地方政府による開発計画及び、村外からの富裕信者らの寄進により、学校、診療所、水力発電所、電話局といった施設が設置され、人々の生活は再び一変した。

近年、ヤアはラジオ・テレビ放送で何度となく紹介されるなどして、地域、民族を問わず、多くのエチオピア人に知られつつある。また、交通網の敷設によりアクセスが改善されたことで、エチオピア各地から大勢の人々が訪れる、同国西部を代表する参詣地となっている。

住民による参詣者への歓待と宗教的使命

ヤア住民は、生前のアルファキーが来客を厚くもてなしたことに倣い、ヤアを訪れる参詣者を手厚く迎える。この歓待の精神が最大限に表出するのが、毎年のイスラームの大祭に参詣者に提供される夕食である。



ヤアの聖者廟のドーム。



聖者廟の入り口で身を浄める参詣者。

聖者廟の参詣台に額を付けて祈りをあげる参詣者たち。

イスラームの祭日に参詣者に提供されるインジェラ。すべての参詣者に行き届くように、ヤア住民は連携してこの大皿を配る。



インジェラを食す参詣者たち。

ヤア住民の焼いたインジェラ。主原料はモロコシ。

大祭前日の日没後、モスク委員会の代表者が夕食を配る旨を参詣者らに拡声器で告げる。住民らは、大皿にインジェラを広げ、牛肉を煮込んだスープ(ワット)を注ぎ、それを聖者廟周辺に寄り集まっている参詣者らに配り届ける。インジェラとは、テフ、モロコシなどの穀物を粉にひき、水に溶いて発酵させ、薄く焼いたクレープ状の食べ物であり、エチオピアの多くの地域で主食として食べられている。参詣者らは、住民に感謝の言葉を述べてそれを受け取り、参詣者仲間とともに食す。

しかしながら、ヤアに暮らすわずか200世帯程度で、エチオピア各地から集まる数千人もの参詣者の食事を準備することは当然容易ではない。モスク委員会を中心として住民たちはこの夕食のための準備を日常的、組織的に行っている。

住民の代表者で組織されるヤアのモスク委員会は、毎週木曜日に、住民全員が参加する奉仕活動を行うよう定めている。その内容はさまざまであるが、宗教施設の補修、清掃といった労働による奉仕が求められることが多い。参詣者への食事の準備も、このような住民の奉仕活動の枠組みによってなされる。

参詣者に振舞われるインジェラの原料であるモロコシは、同委員会が所有する耕地を住民が耕作し生産される。本格的な雨期が始まる前の5月下旬頃になるとモロコシの播種が始まる。そして、翌年2月頃に収穫された後、風選され、モスク委員会の穀物庫に保管される。祭日の1ヶ月前になるとモロコシの製粉作業が始まる。集落内の水力製粉所に運ばれ、製粉されたのち、再び布袋に詰められ倉庫に保管される。祭日が1週間後に迫ると、インジェラを焼く作業が始まる。モスク委員会はモロコシ粉を



風を利用して脱穀した穀物から異物を取り除く作業(風選)を行うヤアの女性。



ヤア住民のムサー家と筆者(左端)。

各世帯に配り、各世帯にインジェラを焼くよう依頼する。基本的には奉仕活動であるため、高齢世帯や病人を抱える世帯などは作業を免除されるが、1世帯あたり、少なくとも30枚程度のインジェラを焼くことが求められる。場合によっては、祭日直前の参詣者の往訪の様子をみてインジェラを焼く量が急遽増やされることもある。

インジェラとともに提供される牛肉のワットは参詣者の供物で作られることが多い。参詣者のなかには、ヤアで誓願を立てるために供物を持って訪れるものも多く、コーヒー豆や蜂蜜など地域の産物も多く見られるが、牛、羊といった家畜を供えるものも少なくない。このようにして持ち込まれた家畜は祭日前夜の夕食に合わせて屠られ、複数のドラム缶を使用して調味料とともに大胆に煮込まれる。

夕食を配る際、住民らは互いにコミュニケーションを取りながら、すべての参詣者に行き届くよう慎重にインジェラを運ぶ。参詣者はそれを受け取り祈禱をあげて食事を始める。この食事の配給は、参詣者の飲

待に宗教的な使命感を持つ住民たちの、長期にわたる労働が結実するクライマックスの瞬間とも言える。

バラカとしてのインジェラ

参詣者のなかには、ヤアで与えられるこのインジェラをバラカと評するものも多い。バラカとは「神に由来する聖なる力、恵み、祝福」を意味する。聖者廟への参詣者がその地に惹きつけられて参詣を繰り返すのも、多くの場合はバラカにあやかるとを期待してのことである。

食事で来客を歓待するヤアのこの慣習は、モロコシの播種からインジェラ焼きに至るヤア住民の組織立った労働に支えられている。そして、この住民全体で日常的に行われる労働は、ヤアに帯びるバラカをインジェラというかたちに具現化するための不可欠な過程になっていると言える。 